

コウノトリ「げんきくん」とその家族 ～大東町でのコウノトリの暮らし～

生物多様性研究分科会 北村 清

1. はじめに

1971(昭和 46)年に日本から絶滅したコウノトリは、豊岡市での人工繁殖等の取り組みにより 2005(平成 17)年、野生復帰に向けて初の放鳥が行われ、それ以降野外繁殖も含めて全国に広がり、2020(令和 2)年には国内で生息しているコウノトリが 200 羽(飼育を除く)に達した。大東町に棲みついたコウノトリ「げんきくん」は、2015(平成 27)年に福井県越前市で放鳥され、太陽電池による GPS 発信機が取り付けられており、現在でもリアルタイムで位置情報*1が判るようになっている。それらの追跡結果等から「げんきくん」は日本にいるコウノトリの中でも特にドラマチックな半生を送っており、当時、兵庫県立コウノトリの郷公園園長であった山岸哲氏が 2018(平成 30)年に「げんきくん」の半生を綴った「げんきくん物語」*2の本を子供向けに出版されている。(写真-1)



本投稿では、「げんきくん物語」以降の大東での「げんきくん」とその家族の暮らしについて報告する。

写真-1 「げんきくん物語」表紙

2. 「げんきくん」の家系図

現在、日本で生息しているほとんどのコウノトリには、巣立ち前に足環が取り付けられ、個体の識別を行うことができる。*3 また、日本コウノトリの会・東京大学・中央大学協働プロジェクトにおいて、市民参加によるコウノトリのモニタリングが行われており、個体のコウノトリの居場所がおおよそ判るようになっている。*4

「げんきくん」は、図-1 に示すように 2017 年より 4 年連続でトータル 16 羽の雛を誕生させている。

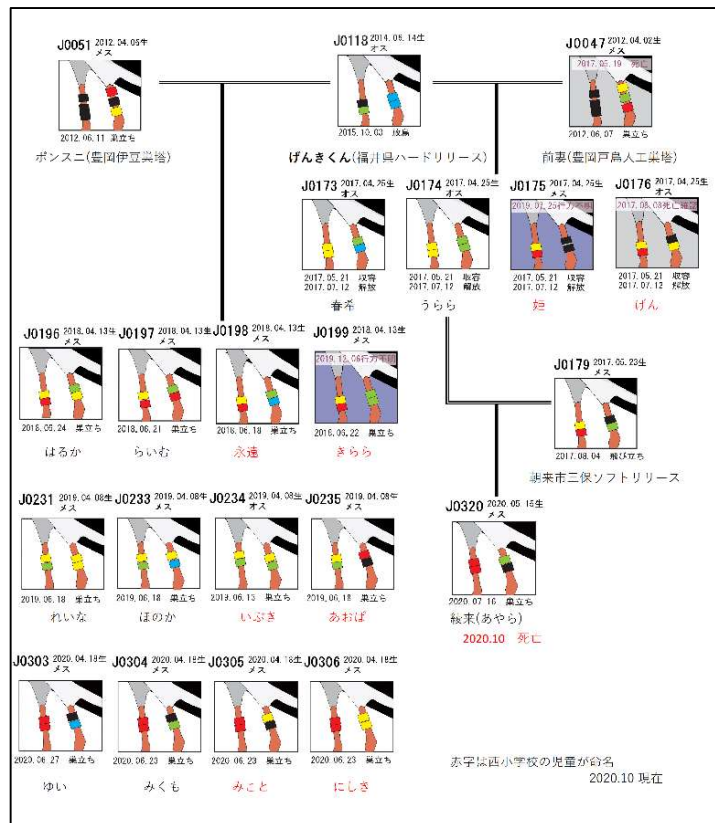


図-1 「げんきくん」の家系図

(1) 2017 年生まれの雛たち

「げんきくん」は福井県越前市で放鳥されて以来、宮城県から九州そして朝鮮半島まで移動していたが、2016 年 11 月から大東町に棲みついた。そして、豊岡生まれのメスとつがいになり、集落内の電柱（写真-2）に営巣し 4 羽の雛が誕生した。しかし、メスの親鳥は、駆除中のサギと間違えられ誤射により死亡したため、雛たちは兵庫県立コウノトリの郷公園に移して人工飼育され、2017 年 7 月 12 日に大東町より放鳥された。営巣した場所が雲南市立西小学校の近くであったことから、4 羽の雛のうち、2 羽の愛称を西小学校の児童が「姫」（メス）、「げん」（オス）と命名し、あとは一般公募により「春希」（オス）、「うらら」（オス）と命名された。



写真-2 「げんきくん」営巣場所

「げん」は、放鳥後間もない 8 月 9 日に鳥取市気高町で死亡が確認され、胃の中には建材に使われる細長い発砲ゴムが詰まっていた。（写真-3）おそらく、餌のヘビやドジョウと間違えて食べ、衰弱死したとみられる。



写真-3 胃の中の発砲ゴム

「姫」は 2019 年 7 月以降行方不明となっているが、「春希」と「うらら」はコウノトリ市民科学の安否確認情報※4 から過去の行動履歴が推測できる。それらの資料を基に滞在期間を整理し、下図に示す。



図-2 「春希」の行動履歴



図-3 「うらら」の行動履歴

安否確認情報は 2018 年から実施されており、それ以降は「春希」、「うらら」とも豊岡周辺に棲みついている。「うらら」は、今年、兵庫県朝来市でソフトリリースされたメスとつがいになり京都府綾部町内の電柱で初めて雛が誕生し、「綾来」と命名された。しかし、「綾来」は巣立って間もない 10 月に京丹後市内で死亡しているのが見つかった。

(2) 2018 年生まれの雛たち

妻を亡くした「げんきくん」は、複数の若いコウノトリと大東町付近で暮らしていたが、豊岡市生まれの「ポンスニ」とつがいとなり、2017年と同じ電柱で営巣した。「ポンスニ」の愛称は、韓国語でポンハ村のお嬢さんという意味で韓国内を1年1か月間滞在した後、大東町に飛来し「げんきくん」とつがいになった。4羽の雛が誕生し、西小学校で命名された「永遠」(メス)、「きらら」(メス)、一般公募で命名された「はるか」(メス)、「らいむ」(メス)が6月に巣立った。「らいむ」は2019年12月以降行方不明であるが残りの3羽は各地を転々としながら暮らしている。

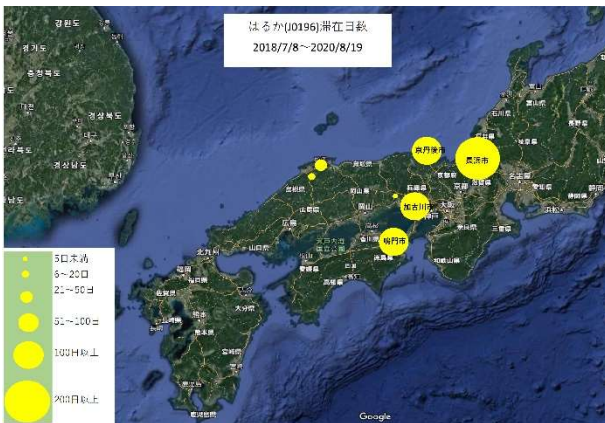


図-4 「はるか」の行動履歴

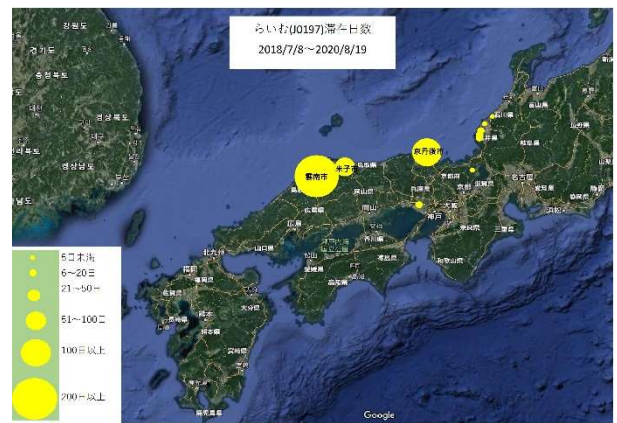


図-5 「らいむ」の行動履歴

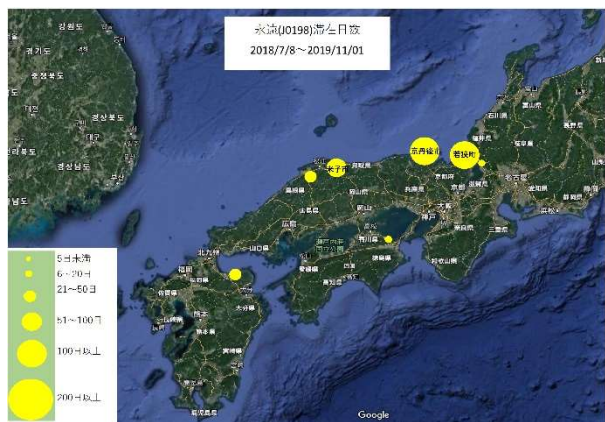


図-6 「永遠」の行動履歴

「はるか」は、京丹後市を中心に、長浜市、加古川市、鳴門市等で暮らし、「らいむ」は、雲南市と京丹後市を行ったり来たりしていると思われる。「永遠」は、2019年11月に米子市で確認されて以降、目撃情報が無い。

(3) 2019 年生まれの雛たち

「げんきくん」と「ポンスニ」のペアは、これまで営巣していた電柱から600mほど離れた西小学校内に設けられた人工巣塔で巣作りを行った。この巣塔は、2017年11月に地元の地域自主組織「春殖地区振興協議会」が設置したもので、西小学校では、営巣する2年前からコウノトリを題材にした環境学習やふるさと学習に取り組んでおり、児童は目の前でコウノトリの巣作りが観察でき大変喜んでいる。この年生まれた雛は、西小学校で命名された「いぶき」(オス)、「あおば」(メス)、一般公募の「れいな」(メス)、「ほのか」(メス)の4羽が巣立った。



写真-4 西小学校内の人工巣塔



図-7「れいな」の行動履歴



図-8「ほのか」の行動履歴



図-9「いぶき」の行動履歴

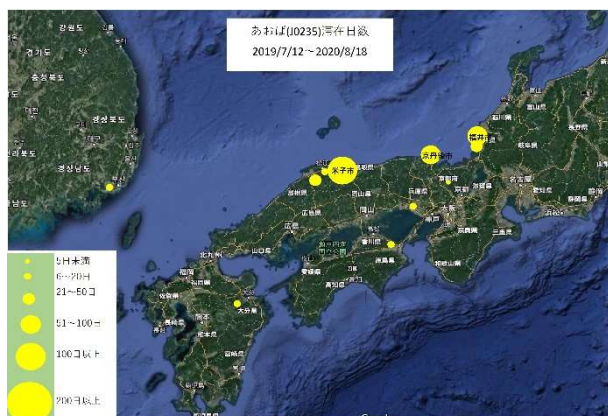


図-10「あおば」の行動履歴

「れいな」は、雲南市、米子市周辺で確認されており、行動範囲は狭いと思われる。「ほのか」「いぶき」は豊岡市、雲南市、米子市周辺を行ったり来たりしている。「あおば」は、福井市、越前市、米子市、京丹後市、大分県竹田市等を転々としており、16羽の雛の中で唯一、海外(韓国釜山広域市)で確認されている。このように、雛によって行動範囲や長く滞在する場所や滞在日数が異なっている。

(4) 2020年生まれの雛たち

昨年同様、西小学校の人工巣塔で4羽の雛が誕生し、「ゆい」(メス)、「みくも」(メス)、「みこと」(メス)、「にしき」(メス)と命名された。4年連続4羽の雛が巣立ったのは、全国でも稀なケースである。10月現在、「ゆい」は京丹後市、「みくも」は米子市、「みこと」は大山町、「にしき」は豊岡市に滞在しているという情報がある。

3. 雛たちの行動範囲

大東町で巣立った雛たちは、1か月ほど巣の周辺で暮らしているが、その後は、日本海側を北上して豊岡周辺に移動している。これは、日本海側の地域がコウノトリの餌となる田んぼの生き物が豊富であるからだと推測される。特に、餌が減少する晩秋～冬場は、降雨量の多い

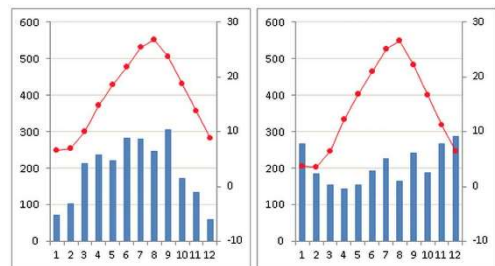


図-11 太平洋側(左図)と日本海側(右図)の雨温図

日本海側の田んぼでは、わだち等に水たまりができやすく、餌となる水生生物が生息しやすい環境だと考えられる。ただし、日本海側でも新潟以北になると豪雪地帯となり、水たまりが積雪により覆われてしまい、餌を捕ることができないなどの理由から北陸や東北に滞在することは少ないと考えられる。

2020年8月の雲南市周辺でのコウノトリの目撃情報^{※4}では、**図-12**に示すとおり17羽で、この内「げんきくん」とその家族は9羽であった。しかし、12月には、雲南市に「げんきくん」と「ポンスニ」の2羽だけになっていることから、餌が豊富にある夏場は多くのコウノトリが雲南市に飛来するが、餌が少なくなる冬場は「げんきくん」と「ポンスニ」のなわばり意識が強く雲南市周辺へ移動している可能性が考えられる。12月7日の目撃情報では、松江市、出雲市、米子市周辺に16羽が確認され、そのうち「げんきくん」の雛は、3羽が確認されている。

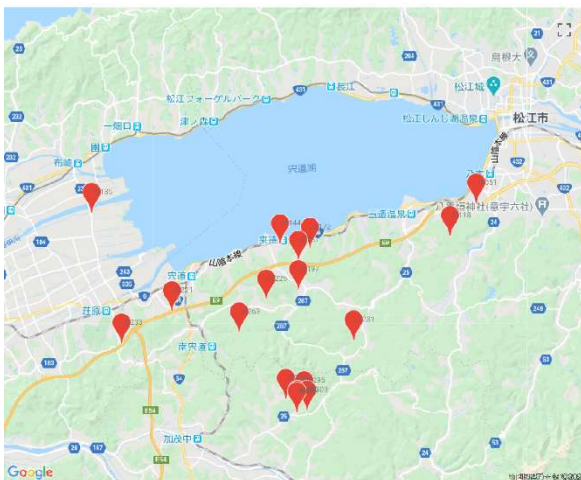


図-12 目撃情報 2020. 8. 19
コウノトリ市民科学より

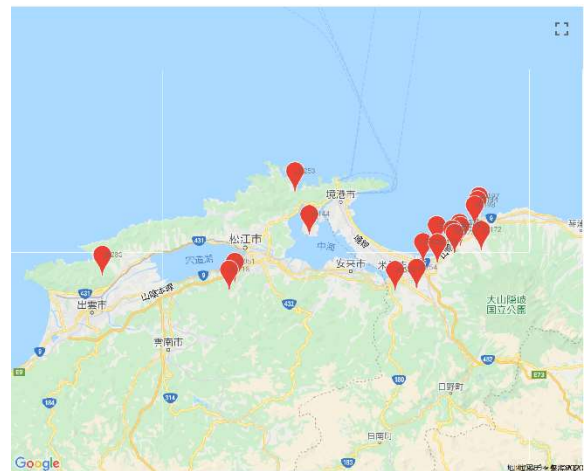


図-13 目撃情報 2020. 12. 7
コウノトリ市民科学より

4. 雛たちの性別

冒頭に示す「げんきくん」の家系図を観ると過去3年間に生まれた雛12羽のうち11羽がメスであった。兵庫県立コウノトリ郷公園によると、近年メスに比べオスが少なく性比が偏ってきたとの報告^{※5}がある。現在日本にいるコウノトリは、兄弟姉妹婚などの近親婚が増加しておりこれらの原因も指摘されている。これらの課題解決のために共通していることは、遺伝的多様性の維持と増大をさらに強化することである。幸い豊岡では、大陸生まれとみられる野生個体が飛来し、放鳥個体とペアになり豊岡で雛が育っている。大東生まれの雛たちも国内だけでなく大陸まで行ってペアを探してくれることを期待する。

5. 西小学校の取り組み

雲南市立西小学校は、「げんきくん」が初めて電柱に営巣した場所から約600mしか離れておらず、学校周辺で「げんきくん」やその雛たちが目撃され、子供たちも関心を持っており、全校あげてコウノトリへの支援が行われている。具体的には、

学校周辺での目撃情報を貼り付けたコウノトリ見守りボードの作成や周辺の田んぼでのいきもの観察などコウノトリを題材にした環境教育が行われている。一般的にコウノトリは毎年同じ場所で営巣するが、一人一枝運動など、子どもたちの願いが通じたのか 2019 年からは校庭に設けられた人工巣塔で営巣し、校舎内から「げんきくん」の子育ての様子を真近かで観察でき、西小学校のホームページ※6 でその様子が公開されている。

6. おわりに

生物多様性研究分科会では、3 年前から『なぜ、雲南市はコウノトリに選ばれたのか』をテーマとして餌資源調査や水路調査等を行ってきた。結論としては、雲南市において餌が豊富であるのは間違いない理由であると思われるが、最も重要なのは「げんきくん」というスターコウノトリに雲南市が気にいられたことだと思う。すなわち、出雲の縁結びの神様が「げんきくん」と雲南市を結びつけたのだと思う。「げんきくん」はこれからも多くの人々に見守られながら、いつまでも記憶に残る伝説のコウノトリとなるのは間違いないと思う。今後とも、当研究会は「げんきくん」を見守っていきたい。



写真-5 「げんきくん」とその家族たち
2020. 6. 30 西小学校 HP より

《参考文献》

- ※1 福井県：<https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/shizen/kounotori/>
- ※2 山岸 哲(2018)：げんきくん物語, 講談社
- ※3 兵庫県コウノトリの郷公園：<http://www.stork.u-hyogo.ac.jp/>
- ※4 コウノトリ市民科学：<https://stork.diasjp.net/>
- ※5 大迫 義人(2012)：コウノトリの野生復帰－新たな展開と目標
- ※6 雲南市立西小学校：<https://shimane-school.net/unnan/nishi-sho/>